

京都市帝國大學經濟學會

經濟論叢

第七十卷 第五號

大正二十一年十一月一日發行

論叢

鎌倉時代の土地制度 文學博士 三浦 周行
 租税の逋脱 法學博士 神戸 正雄
 水戸藩に於ける各種の貯穀 法學士 本庄榮治郎
 海運の獨占より生ずる利益 法學士 小島昌太郎

時論

復興事業と經濟界の現況 法學博士 河田 嗣郎
 震災の教訓と復興問題 法學博士 山本美越乃

說苑

マルサスの地代論に就て 經濟學士 谷口 吉彦
 京都市に於ける家賃の統計的研究 經濟學士 岡崎 文規
 勞働生産力と勞賃 經濟學士 森 耕二 郎

雜錄

安政震災の復舊策に就て 法學士 本庄榮治郎
 震災地と産業組合 經濟學士 大森 健作

震災の教訓と復興問題

山本美越乃

(一)

輓近我が國の情勢は之を何れの方面より觀察するも、決して心ある人々をして其の前途を憂へしむることなくして過ごし得るものは一もなかつた、社會上に於ても、政治上に於ても、道德上に於ても、風教上に於ても、吾人をして言はしむれば一として社會進歩の一過程として之を是認せしむるに足るものはなかつた、奮きを棄て、新しきに就かんとする各人の希望は、社會進化の一要因たることは何人も之を認むる所であるが、併し今日に至る迄世人の口にせる所謂社會改造とか因襲打破と稱するものは、果して何を意味するのであるか、彼等が故意に之を爲しつゝあるその非難は或は免れ得べしとするも、少くとも其の結果に對する淺見無思慮なるより、其の所謂改造なるものは社會を改善せんが爲めの改造に非ずして、却て之を改悪せんが爲めの改造となり居る場合が決して尠くない、否甚しきに至りては、其の國家社會に及ぼす影響と云ふが如きことを考ふるよりは、先づ自己の賣名又は營利の爲めに、其の結果が社會を毒し國家の前途を危うするも此の如きことは毫も之を顧みずして、無責任なる言説を弄し、或は又社會教育の一機關たる

べき重大なる責任の存することを忘れ、唯俗耳俗目に媚ぶることに依りて其の財囊を推取することにのみ汲々たるが如き、不徳なる新聞雜誌類の横行濶歩せる時代であつた、彼等は眞向より現代の資本主義的經濟組織に極力反對せんとするが如き態度を示しつゝ、然かも彼等自らは資本主義的經濟組織の中核を成せる自利主義若くは利己主義の城壁内に籠居して耻づる所を知らず、矛盾撞著最も匪棄すべき社會相は、是等の假面を被れる偽善的の言論界に殊に著く現れて居つた。

更に政治上の方面に於ては近年其の腐敗は絶頂に達し、所謂政黨政治なるものは、我が國に於ては議會に多數を制する政黨が、自黨の勢力の擴張と黨員の私腹を肥さんが爲めに、名を國家の政務に藉りて白晝公然惡政を強行せんとする墮落政治の異名となつて居る程腐敗の極に達して居つた、所謂國民の選良と稱せらるゝ者の多くは、或は名を鐵道の敷設に假りて殆ど無價値なる自己の所有地を高價に國家に賣付けんことを計畫し、或は政商と結托して或種の利權と交換に巨額の報酬を約して私腹を肥さんことにのみ没頭せるが如き實況であつた、故に之をしも國民の選良と稱し得べくんば、市井の無賴漢と雖も尙は國民の典型たるを失はぬと稱して可い、議政壇上に多數を恃みて横暴を是れ事とする今日の所謂政黨者流には眼中唯自黨あるを知つて國家あるを知らず、故に國民全體の福利よりせば、現今の如き腐敗墮落の極に達せる劣惡なる政黨政治の下に國家の運命を托せんよりは、寧ろ變則ながら公平無私なる官僚政治の下に國政を處理せしめた方

が遙に幸福であるとも言ひ得る。

次に又之を國民の道義觀念の廢頽に付きて考ふるも、頗る寒心すべきものがあつた、一般に之を論ずる時は國民の道義觀念は教育の進歩と共に益々向上すべき筈で、若し然らずして教育の進歩に反比例して道義觀念の次第に荒廢するものとせば、結局教育は國民を人格的に破壊し去るものであると言はねばならぬ、然るに近時の傾向は心ある人をして多少此の憂ひを抱かしむるものがあつた、農學士山田某の虐殺事件の如きは之を例外とするも、高等教育を受けた者にして國法を無視し破廉耻罪を犯す者の近年著き割合を以て増加し來つたことは覆ふべからざる事實である、彼等の受けたる智的教育は、偶ま無教育者よりも犯罪行爲を巧みに爲すの武器として役立つ以外には、世道人心を裨益する所はなかつた、偏智教育の國民の前途を誤ること寔に恐るべきものあることを、今や國民は眞摯に考慮せざるを得ざる時となつた、吾人の信する所に依れば、教育の目的は一言にして之を表示せば人格の完成に在ると考へる、茲に所謂人格の完成とは、古き語であるが智育上に於ても、徳育上に於ても、體育上に於ても、能ふ限り圓滿に發達せる人間を鍊へ上げることである、單に頭腦のみ發達するも身體各部の健全なる發達に注意することを怠り、或は又頭腦及四肢五體のみ發達するも、最も大切なる心神の修鍊を顧みざるが如き教育方法は、結局國民を驅つて不具者たらしむるものである、教育事業を恰も營利事業の如くに考へ、學

校を經營すると商店を經營すると其の間に何等の區別を認め得べからざるが如き現代の教育方法は、早晚根柢より之を覆へされねばならぬ運命を持つて居つた、此の如き状態なるが故に、嘗ては師弟の情は親子の情に次で最も親しみあるものとして、其の間に一種言ふべからざる情誼の掬すべきものがあつたが、今日は教ふる者も教へらるゝ者も一度校門を出づる時は恰も路傍の人の如く、其の間に何等の親しみもなければ又情誼の掬すべきものもない、否甚しきに至りては主客顛倒して、何れが師たり弟たるやを辨別し難き者さへある、此の如くにして教育の効果の擧らんことを望むは、木に縁りて魚を求むるよりは難い、相當の教育を受けたる者にして既に然りである、教育無き者の間に於ける不徳の行爲に至りては殆ど枚擧に遑がない。

更に風教上の問題に關しては一層慨嘆に堪ざるものがあつた、凡そ一國の風教の如何を知らんと欲せば、男女間の關係に付きて觀察することが捷徑であるが、近時我が國に於ては戀愛至上義と云ふが如き美名の下に、實は獸慾至上主義を露骨に實行せんとするの風漸く盛んとなり、而して彼等は其の醜行を辯護せんが爲めに殊更に之に種々の理由を附し、私通の如きは人生の常事として之を怪しまざるのみならず、甚しきに至りては姦通の大罪を犯すも、却て之に同情の贊辭を呈せんとする程、國民の風教問題に對する嚴正なる批判力は麻痺しつゝあつた、尤も世の姦通を辯護する論者等は、若し自己の半身にして他人と姦通するが如き場合にも、尙ほ是れ戀愛至上

主義の見地よりせば當然の事なりとして平然たり得るやは頗る疑問に屬するも、兎に角姦通者の如き人倫の大道を蹂躪する反逆者に對して迄も、尙ほ其の動機を詮索して之を辯護せんとするが如き時世の傾向は、夫れ自身に於て既に風教問題に對する國民の健全なる判斷力の麻痺を示せるものと稱して可い。

以上の他社會問題と謂ひ、勞働問題と謂ひ、思想問題と謂ひ、婦人問題と謂ひ、何れの方面に於ても近時我が國の情勢は、全く歐米に於ける是等の問題の表皮を輸入して、之を煎劑として服用しつゝ、ありしに過ぎぬと評してよい、勞働者自己の内に燃ゆる熱烈なる向上心と、鍛鍊修養を積める自覺心の發露としての勞働運動に非ずして、多くは勞働の何たるやを自ら體驗せしことすらなき、遊食浮浪の徒等の煽動的の言動に依りて盲動せる無自覺なる勞働運動、都會に於ける勞働運動と全く其の類型を一にせる農村に於ける無智なる小作人等の思慮なき不作同盟、主義主張の爲めにするよりは寧ろ自己の生活の爲めに、否甚しきに至りては其の虚榮的生活の爲めに、名を宣傳に假りて他國に其の資を仰ぎ、自己の虚名と共に同胞を賣らんとせる所謂共產主義者及無政府主義者等の賤劣なる運動、家政の整理及子女の教養等の最も貴むべき女子の天職を忘れ、奢侈と虚榮と外貌の粉飾とは恰も女子の特權なるが如くに考へ、遊惰安逸に日々を徒消するか、然らずんば一知半解の新理想主義なる美名の下に、婦人の解放より進んで貞操の解放私通の公認を

すら敢てして毫も羞づる所なき所謂新しき女なる者の増加、是等は何れも堅實なる社會進化の過程として之を認容するには餘りに醜惡なるものたることは、心ある者の何人も窈に憂ひとせる所である、然かも今次の震災以前には此の種の社會現象は到る處に之を目撃することを得たのである、殊に帝國の首都たる東京は是等の醜惡なる社會現象に於ても常に其の先驅をなし、輕佻浮薄なる模倣的文明及虚偽的文化の中心地となつて居つた、而して若し斯かる社會現象に對して之を痛嘆する者ある時は、虚偽虚榮の毒酒に酔へる一般民衆等は、之を以て古き革袋は遂に新酒を盛るに適せずと云ふが如き皮肉と痛罵を以て之に酬ひ、自ら反省せんとする心の餘裕をすら持たなかつた。

人窮すれば天必ず道を開く、時世人心の傾向人力を以て之を如何とも爲す能はざるに至るや、天は之に對して必ず轉廻の機會を與ふ、此の意味に於て今次の帝都の大破壊は、我が國民殊に其の代表的都市の住民に對して、天の下したる一大鐵錘であると言ふも敢て失當でない、故に今日我が國民の眞に反省自覺すべき秋であつて、歐米文明の表皮の模倣及虚榮的生活に對する憧憬より目を醒ますべき千載一遇の機會である、天は富める者にも貧しき者にも一樣に日を照らし雨を降らすが如く、正しき者にも正しからざる者にも一樣に震火の洗禮を與へた、今にして我が國民が反省自警を怠つたならば、恐くは次に來るべき大自然の制裁は今日よりも更に慘烈なるもの

があるであらう。

(二)

以上は我が國民の過去の實況に對する吾人の感想の一端を述べたに過ぎぬが、過去に對する國民の内省自察と共に、併せて考ふべき重大なる當面の問題は、斯くして破壊せられたる帝都の復興を如何にすべきかとの問題である。

今次の災厄に因りて我が國の受けたる損害は、有形的にも無形的にも極めて莫大なるものたることは言ふを俟たぬが、無形的の損害は殆ど吾人の算定力以外に在るを以て姑く之を別とし、單に有形的の損害即ち算定力の範圍内に入るべき損害のみに付きて考ふるも、精確なることは固より未だ之を知り得ないが、家屋家財商品等の私有財産の損害額は、東京横濱其の他の主なる被害地を合して約九十八億圓、之に加ふるに公有財産の損害額約十四億圓、合計百十二億圓の巨額に上り、假りに日本全體の富力を八百億圓内外と推定せば、其の約八分の一を損失したこととなること云ふことである、東京市内の燹失したる建築物の損害額のみにも、約十五億圓に達すると稱せられて居る、何れにせよ此度の震災の爲めに我が國の受けたる損害は實に驚くべき巨額に達し、就中東京は其の損害最も大なるものがある、是等の損害を回復することは到底一朝一夕には出來得ないが、併し東京は帝國の首府たる關係より、少くとも現在の荒廢せる状態を成るべく速

に整理して、内外人の眼に永く慘禍の現状を曝し置くことだけは致したくないと云ふことは、恐らく國民一般の期せずして一致して居る所であらうと思ふ、故に所謂帝都の復興と云ひ再興と稱するも、其の理想的計畫の如きは國力の如何を考慮して徐ろに之を實行することとし、唯當面の問題として若し國民全體に帝都の復興に協力せしむべきものありとせば、既に國富の少からざる部分を烏有に歸せしめたる今日に於ては、能ふ限り國民に重荷を負はしめざる程度に於て、大詔の聖旨を奉じて荒廢せる現状の回復を計ると云ふ方針の下に復興事業を進めるべきであつて、それが帝都たるの故に假令國民の負擔を増加せしむるも、速かに理想的建設を成就せなければならぬと言ふが如き理想論は此の際は之を避くべきである。

然るに政府當局の帝都復興事業に對する態度を観るに、其の輪廓の如何にも尨大にして、之が爲めに優に一省に匹敵すべき一大官廳を設け、數百の官吏を任命して其の計畫に當らしめんとするが如き有様で、之が建設に要する資金の如きも頗る巨額に達し、其の調達方法としては廣く内外債に依らんとするものゝ如くに傳へられて居る、帝都復興の必要及國民も能ふ限り協力して其の完成を期する様努むべきことは、大詔の煥發に照すも明かであつて、此の事に對しては何人も異論を挟む者はないであらうが、其の方法に至つては固より大に考慮を要すべきものがある、元來東京は帝國の首都たるが故に、成るべく他國の首都に劣らざる設備と體面を保たしめんことを

國民としては冀望するものであるが、併し其の復興又は建設に付きて先づ第一に責任を負ふべき者は、常に其の地に居住して直接其の恩恵に浴し利害關係を感じることに最も切なる東京市の住民でなければならぬ、換言せば東京市の復興は主として東京市民の双肩に擔はるべき問題であつて、國民一般はそが偶々帝都たるの故を以つて帝國の體面を思ふの點より、復興事業に相當の援助を與ふべきであると云ふに過ぎぬ、唯今日の場合に於ては東京市民の大半は、不慮の災厄の爲めに其の財産を烏有に歸せしめたるを以て、復興資金の調達力の如きも頗る薄弱となれるより、帝都以外の住民と雖も國民として能ふ限り復興事業に援助を與ふるの必要はあるが、併し之に要する資金は之を強制的に負擔せしむるも可なりと云ふが如き性質のものでは固よりない、従て復興資金を増税に仰がんとするが如きことは勿論不可であるが、假りに之を内外債に求むるとしても、其の額は出來得る限り最少限度に止め、此の機會を利用して歐米の首都と輪奐の美を競はんとするが如き虚榮的の復興計畫は之を慎まなければならぬ、巨額の内外債を起すも尙ほ歐米の首都に比して遜色なき設備を成さざるべからずと思考するが如き論者の心理は、恰も外觀の美を誇らんが爲めに身分不相應の負債をなすも、尙ほ邸宅の修築に全力を傾注せんとする虚榮家の心理と毫も異なる所はない、何れも一種の虚榮の爲めに不生産的の浪費を爲さんとする者たるの非難は之を免るゝことを得ない、殊に巨額の外債に依る帝都の復興の實現の如きは、假令其の目的を

達し得たりとするも、債權國をして自國の恩恵に依りて復興事業を成就することを得たりとの念を抱かしめ、從て其の完成は敢て我が國民の名譽となすに足らぬ。

又退て之を經濟的の方面より考ふるも、帝都の復興に要する資金は産業上に要する資金とは全く其の性質を異にし、之に依りて直接國富を増加せしむるものではない、内に在りては産業上の活動は益々敏活に行はれ、外に對しては通商貿易は彌々好況を呈しつゝある黄金時代に於ては、直接國富の増加に關係を有せずとするも、間接に之を助くるの手段となるが如き事業の資金を内外市場に募集せんとする事は、必ずしも不可なりとせざるも、國內の産業は殆ど活氣を失ひ、通商貿易は極度に沈衰せる現今の狀勢の下に、直接國富の増加に關係を有せざる事業の爲めに、内債を起さんとするが如きことは、現に資金の硬塞を訴へつゝある産業社會に、更に一層の苦痛を與ふるの結果を生じ、假令復興事業に必要な材料其他の物資の供給者及該事業に關係を有する一部の國民は、之が爲めに利する所ありとするも、一般産業社會は今日よりも更に不況に陥らざるを得ざることは明かである、若し此の如き資金を内國市場に於て募集し得るの餘力存すせば、吾人は斯かる餘力を寧ろ産業資金の融通難に苦みつゝある方面に適當に分布せしむることに依りて、直接國富の増加に役立ち得べき産業上の活動に援助を與へることの方が、今日の場合に於ては遙に急務であると信する。

更に又復興資金は之を外債に仰ぐとせんか、這是根本に於て變則の方法たることを充分に了解して、募債額を能ふ限り減少することに心懸けねばならぬ、何となれば本來首都の復興事業の如きは、其の資を外國に仰いで迄も之を完成せしめねばならぬと云ふ如き性質のものではないからである、併し帝都の住民には自ら之を負擔するの實力なく、増税に依る資金の調達固より不可であり、内國市場に於ける起債又大に慎しまねばならぬとせば、結局變則ながら止むを得ず其の資金の一部を外債に仰ぐの他途なきこととなる、既に變則且止むを得ざるに出づる方法なりとせば、其の起債額の如きも能ふ限り之を小ならしむるの必要あることは論を俟たぬ、假令外債の實體は正金に依るも、或は又近時傳へらるゝが如くに復興事業に必要な物資の輸入に依るも、何れにしても國民の負擔は決して輕くない、正金に依る時は利子の仕拂に對する苦痛の感は、多少外債に對する警戒の念を國民に與ふるも、又其の半面に於ては輸入爲替の便を濫用せんとするの弊を生じ易く、物資殊に國內に於けるよりも低廉豊富なる物資の輸入に依る時は、斯かる機會に乗じて往々思惑的の輸入を爲さんとする誘惑に陥り易い、故に何れにしても極めて細心の注意の下に最少限度の必要額を定め、政府の嚴重なる監督の下に之を實行せしむることとし、變則且萬止むを得ざるに出づる方法たる本旨を徹底せしむる様に努めねばならぬ、此の主旨よりせば、外債は正金に依るよりも復興事業に必要な物資を、政府自ら其の數量を限定して輸入せしむる方が安

全であると言ひ得る。

要之、帝都の復興事業の如きは、我が國の經濟的事情の決して樂觀を許さざる今日に於て、巨億の外債を募り所謂猪馬に重荷の苦痛を國民に負はしむるも、尙ほ之が完成を急がねばならぬと云ふ如き性質のものでは決してない、我が國の經濟的實力の如何を考慮して、現在は先づ其の分相應の施設を爲すに止め、經濟的實力の進展に伴ひ、徐ろに之が完成を期せんことに心懸くるも決して遅しとしない、大難に處して尙ほ事の本末を誤らず、緩急其の宜しきを得る政策を實行してこそ、初めて大詔の聖旨にも叶ひ、國民の期待にも副ふ所以であつて、徒に老大なる計畫のみを立て、國力に伴はざる巨額の資金を之に投ずるも、敢て顧みざらんとするが如きことあらば、是れ頭腦の大を誇らんことにのみ汲々として、却て四肢の枯るゝを忘るゝの愚を追ふに等しと言はねばならぬ、故に復興事業に於ても政府及國民の共に『ホットー』となすべきは、飽迄冷靜に現在の國力に相應せる施設を以て満足すべしと言ふに在る。

(完)